

佐渡の廃校 交流の酒蔵に



地元住民が新銘柄「学校蔵」を試飲した。いずれも佐渡市の旧西三川小学校

真野鶴の尾畑酒造 新銘柄「学校蔵」



経済

日本酒真野鶴の醸造元、尾畑酒造（佐渡市真野新町）は廃校になった小学校を改装した酒蔵でつくった新銘柄「学校蔵」を売り出した。生まれ変わった学校の校訓は「幸醸心」。酒造りを通して人のつながりから幸せを醸す。そんな思いから、来年は「酒造りの学び場」の試みも始める。

3日、酒蔵となった佐渡市の旧西三川小学校に住民を集め、設備のお披露目会と酒の試飲会があった。卒業生で農家の男性(63)は酒をちびりと飲んで「うまい」とうなり、「酒蔵とし

社長が校長 校訓は「幸醸心」

て残すのは良い取り組み。今後も人が集まるように願っている」と話した。

真野湾沿いの高台にある同校は2010年、136年の歴史に幕を閉じた。体育館はスポーツ団体がバドミントンの練習場に使っているが、ほかの教室は放置状態だった。同社は14年5月、理科室と理科準備室を改造して酒蔵とし、そこで酒造りを始めた。

蔵は通年で酒造りができるように整備。金属製のパネルを壁に張って空調設備も完備し、約2千坪のタンクを2基置いた。これまで冬に酒を仕込んできた同社としては、春、夏の酒造り

は挑戦だった。酒米や香りがけの杉材といった佐渡産の材料ばかりをそろえ、3種類の新銘柄「学校蔵」を生み出した。

小学校跡を酒蔵にしたきっかけは、同社の平島健社長(50)が、少子化によって島内の学校が統廃合していく状況を知ったからだ。10年前、10市町村が合併して佐渡市になったのち、市教育委員会が学校の統廃合を検討した。平島社長は検討委員会の委員の一人になり、同校が廃校の方針であることを知った。「高台から夕日が望める素晴らしい場所なのにもったいない」。その後、別の現場で朽ち果てた廃校舎も見た。

「自分は酒屋。酒造りしかない。それに酒を学ぶ場は挑戦だった。酒米や香りがけの杉材といった佐渡産の材料ばかりをそろえ、3種類の新銘柄「学校蔵」を生み出した。

平島社長は「人がいなくなる」と地域の活力は落ちる。人を招いて新しいユニケーションができれば、新しいものが生まれるきっかけになるかもしれない」と話した。

独特の味わい 三者三様



新銘柄「学校蔵」。後ろは「蔵の校長」こと尾畑酒造の平島健社長(左)と「日直」こと尾畑留美子専務

酒「学校蔵」は3種類ある。仕込み1号は濃いうまみがうりの生酒と、加熱処理されてほどよい酸味が際立つ辛口の2種類。仕込み2号は、もろみから酒をしぼる際にあえて少量の沈殿物を残した「おりからみ」だ。いずれも一升瓶が3千円。4合瓶が1500円。問い合わせは尾畑酒造(0259・55・3171)へ。(角野貴之)